

アトピー性皮膚炎治療研究会 第26回シンポジウムを終えて

(2021年2月6・7日) ※Web開催

井川 健

獨協医科大学医学部皮膚科学講座教授

はじめに

2021年2月6・7日にアトピー性皮膚炎治療研究会第26回シンポジウムを開催させていただきました。会の準備を始めたころには、この時期くらいまでには新型コロナウイルス感染症の状況もある程度落ち着いたものになっているのではないか、という甘い妄想を抱いておりましたが、結果としては緊急事態宣言期間中となりまして、やむなく全面Web開催という選択をとらざるをえませんでした。研究会のテーマは「温故知新」とさせていただいたわけですが、そのようにさせてもらった意図を、学会ホームページの会頭挨拶より引用させていただきます。

“さて、今回の研究会のテーマは、短く簡潔に「温故知新」とさせていただきました。このような時代にこそ、これまで先輩方が築き上げてきた古典的な皮膚科医療をしっかりと弁えたうえで、新しい時代の素晴らしい効果をもつ(であろう)治療薬の恩恵を、患者さん、われわれ皮膚科医ともに享受していくことが重要ではないか、と考えました。”

アトピー性皮膚炎の分野では、生物学的製剤が治療薬として2018年に保険適用を受けて以来、これまでに考えられていた機序とは違った病態の理解、新規機序をバックグラウンドにした新規薬剤の開発がどんどん進んでおります。そういった背景があるうえでの上記の「温故知新」ということになります。

2020年度の学会が、ほぼすべてWeb開催となる中で、宣伝する機会もなかなかなく、いったいどのくらいの方々に参加していただけるのだろうか、と心配しておりました。さらに、Web配信システム導入の上乗せがあったため、従来の会場開催に比べて必要経費が少々嵩むこととなり、これで参加人数が少ないとなれば大幅な赤字も覚悟する必要がありました(実際、1週間前の予想収支バランスは赤字でした…)

しかしながら、蓋をあけてみますと、結局、最近数年間ではもっとも多い人数のご参加をいただきまして(現地参加の先生も5人いらっしゃいました)収支バランスも黒字となり、後述させていただきますようにご参加くださった皆様方のご協力もありまして、Web開催にもかかわらず盛んなdiscussionも行われました。想定していた中ではもっともよいレベルの会となったのではないかと、思われました。



図1 本シンポジウムポスター



図2 会場の風景

内容

Web開催を決定してから考えたことの1つが、いかにして討論を盛り上げるか、ということでした。皆さんが感じていらっしゃるように、Web開催の大きな弱点の1つが討論の貧弱さにあると思いました。いろいろと検討しましたが、結局準備できたことは、研究会の世話人や幹事の先生方をお願いし

て、各担当セッションを中心に質問やコメントを出してもらう、ということでした。各先生方にとっては、まったくのボランティアであったにもかかわらず、快くお引き受けくださったことには本当に感謝しかありません。さらに、結果的にはこれがうまく機能いたしまして、6日午後から会が始まり、スイーツセッション、スポンサードセッションと進みましたが、質問やコメントが出ずに静まり返

るようなことはまったくなく、さすがに現地開催には劣りますが、ある程度の意見交換ができたように思い、ほっとしながら会の進行を見守っておりました。

初日の夕方に、東京医科歯科大学名誉教授で兵庫医科大学常務理事でもいらっしゃいます西岡清先生に「アトピー性皮膚炎の歴史に学ぶ」という演題による特別講演をいただきました。先生のおっしゃった「病気も時代とともにその形を変えていくもので、アトピー性皮膚炎もまさにそうなのだろう」という言葉には、参加者みなが大きくうなずく姿が頭に浮かびました。

2日目には、事務局の企画として「これまでの治療を振り返る」というセッションを設けさせていただきました。古典的な外用療法や増悪因子対策というアトピー性皮膚炎治療の基本を改めて思い返していただくことを意図しました。若手の先生たちには、逆に目新しいものと感じていただけたのではないかと思います。

一般演題は15題をいただきまして、どれも一筋縄ではいかない報告ばかりであり、Webではありましたが、次々とコメント、質問が飛び交い、本会ならではの熱い議論の一端が感じられたところでもありました。緊急事態宣言まっただ中という状況下にもかかわらず、本当にありがたいことに6つの企業より協賛をいただき、各スポンサードセミナーを企画させていただきました。これもまたバラエティに富み、討論もあり、参加者にとって非常に有

意義であったと考えます。

最後は次期会頭である長崎大学皮膚科教授の室田浩之先生に第27回シンポジウムのお知らせをいただき、無事閉会ということになりました。

おわりに

今回、アトピー性皮膚炎治療研究会 第26回シンポジウムを開催するにあたって、さまざまなことを考えさせられました。学問的なことから会の運営に関することまでいろいろです。本会の規模の研究会の開催でさえ、ある程度の予算規模を必要としますし、現時点でそのソースとして、協賛してくださる企業の存在を無視できません。本来あるべき(会頭が心からやりたい)研究会の形態とスポンサードセッションのバランスは、これからもプログラム編成のうえで大いに悩まされるところかと思いました。

今回は、いろいろな状況を加味すると、ある程度満足できる結果だったように思います。それこそ、協賛いただいた企業の皆様、運営をお手伝いいただいた春恒社さん、われわれの講座の医局員ならびに秘書さん、獨協医科大学皮膚科の同門の先生方、さらには、このような状況下で本会に参加し、熱い討論を再現すべくご協力をいただいたすべての先生方のおかげであると思っております。

本当にありがとうございました。